

氏名・(本籍地)	別所 弘 淳 (埼玉県)
学位の種類	博士 (仏教学)
学位記の番号	甲第105号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	平安期東台両密における教学的交渉
論文審査委員	主査 苜米地 誠一 副査 堀内 規之 副査 福田 亮成

別所 弘淳 氏 学位請求論文審査報告書

「平安期東台両密における教学的交渉」

論文の内容の要旨

本論文は平安時代を中心に、真言宗（東密）の学匠が、天台宗（台密）の学匠である五大院安然（八四一～八八九）を批判しながら、その影響を受けている一側面を論じようとするものである。またそれに先立って、安然における東密（空海（七七四～八三五）教学）の影響についても論じており、それらのことにより「教学的交渉」と題している。

また本論文では、これまでの日本密教研究が、主として東密系研究者に依るものであったために、その業績も東密に関するもの大半であり、台密に関する研究は天台系研究者によって行われてきたが、総合的に日本密教を俯瞰した研究は少なかったとし、これまでも両密教を俯瞰的に論じることの必要性が指摘されながら、未だその研究は十分に進んでいなかったという反省に立って、宗学的立場を離れて、東台両密教の総合的研究をめざそうとするものである、とする。

第一部では、日本天台における即身成仏思想について、安然（八四一～八八九）に至るまでの展開過程を論じている。第一章では最澄（七六七～八二二）と三一権実論争を行った徳一（～八一四）の『真言宗未決文』に見られる天

台宗批判を取り上げ、『釈摩訶衍論』（実際には『大乘起信論』）に見られる三劫成仏の文と、『釈論』同じと龍樹の作とされる『菩提心論』の「即身成仏」との会通をいかに図ったのかを論じ、第二章では徳一またはその弟子集団の中で作られたと思われる『天台宗未決』と、それに反駁した安慧（七九五～八六八）の『愍論弁惑章』について論じ、これが初期天台宗諸師の教説に与えた影響について述べている。更に第三章では安然の教学における空海教学の影響について論じているが、またここでは安然の著作中に、現存しない『即身成仏義』『四種曼荼羅義』の引用の見られることを指摘し、安然当時における空海著作の伝承状況についても言及している。

第二部では『大日経』の教主を論ずる諸師の教学を取り上げる。第一章において安然の教主論の特徴を論じ、「能加持身」「所加持身」「四身互具四身説」にその特徴を指摘している。第二章以降において、その安然の教説に対して院政期の東密の学匠が如何なる対応をしたのかを論ずる。ここでは仁和寺の済暹（一〇二五～一一一五）・信証（一〇九八～一一四二）・覚鑿（一〇九五～一一四三）、興福寺の実範（～一一四四）、東大寺の重誉（～一一三九～一一四三）を取り上げ、彼等が安然の教説である「能加持身・所加持身説」「四身互具四身説」を受容して自らの教説を展開しながら、同時に安然を批判している点の矛盾も指摘している。ことに第六章では、重誉の教主論が他の東密学匠とは異なる点について論じ、十地以下の機根に内証を知らしめんがために、自性身と平等である他受用身が内証を説くとする他受用身教主説であることを明らかにし、重誉の教説が後の東密学匠の批判対象となったことについても検証している。また頼瑜（一二二六～一三〇四）が重誉の教説を他受用身説と判ずる一方で、自性身に取り入れられた他受用身が内証を説くと解釈し、自性身中の加持身説を提唱するうえで、重誉の教説を自身に有益になるように解釈したのではないかと指摘している。第二部で検討されている『大日経』の教主を論ずる問題は、鎌倉時代以降「教主義」として扱われるが、平安期にはそのような問題意識は無く、夫々の学匠が独自の教説を展開している状況を確認し、それらが後の頼瑜の教説に反映することで「教主義」が成立していった過程を明らかにしている。

第三部「非情成仏における問題について」では非情成仏説を取り上げている。第一章「安然の非情成仏論」で、非情が自ら発心し修行して成仏するという非情成仏説を積極的に論ずるようになった最初が安然であることを確認し、しかし第二章「平安初期における東密の非情成仏論」において、東密の学匠である実範・重誉は、同様の非情成仏説を主張しながら、安然に対する言及（受容・批判）が無く、空海の『即身義』や『声字義』を根拠としていることを指摘する。しかし一方で第三章「頼瑜の非情成仏論」において、頼瑜には安然説を受容した非情成仏説が説かれていることを指摘する。

審査結果の要旨

著者本人も記すように、本論文は平安期の東台両密教の教学的交渉を論ずるには、取り扱っている問題の範囲にしても、人物にしても、あまりに限定的であり、十分なものとは言えない。また「平安期」という時代設定をする中で、鎌倉末期の頼瑜を取り上げることも問題とされる点である。しかし頼瑜の教学は、近現代につながる伝統宗学の出発点に位置するものであり、いわば頼瑜における院政期東密学匠の教学からの影響は、平安期の東密教学の後世に渉る影響と、その特徴を映し出すものでもあり、本論文における最も重要な指摘を含むものともなっている。ただし「教学的交渉」というには、東密・台密相互の教理的キャッチボールが為されておらず、主として安然から東密諸学匠に対する一方的影響が論じられていることから、「東密における安然教学の受容と展開」という題名が相応しかつたとの指摘が為された。

第一部で安然が東密教学の影響を受けている点を論じてはいるが、徳一教団と初期天台宗教団との関係の問題は天台宗教団の真言密教受容の問題であり、決して東密からの影響といえない面もある。ただ円仁（七九四～八六四）による密教将来以前の天台宗教団における密教受容の問題を解明した点は高く評価される。また安然による空海教学の受容といっても、その実体は異本『即身義』や『四種曼荼羅義』、更には現存しない『即身成仏義』などが含まれており、これら空海真撰ではない文献の影響は、安然がこれらの文献を空海撰述と認識していたか否かの問題と共に、空海からの影響と判断すべきか否か問題の残るところであろう。ただし現存しない『即身成仏義』の指摘は重要である。

第二部における『大日経』の教主をめぐる議論の問題も、密教の教主論という点では、『金剛頂経』の教主の問題が除かれるし、また教主論という点では、顕教の教主をどのように捉えるのか、という問題も残されることになる。また平安時代の真言密教（東密・台密双方に亘る）全体の教学的議論の中で、教主論の問題がどれほどの重要性を持っていたかは疑問な点でもある。どちらかといえば成仏論と教判論が論争の中心であったであろう。とすれば安然教学に対する批判と受容といった面においても、これらの問題を解明することが重要であると考えられる。本論で取り上げた教主論の問題は、鎌倉期以降になって頼瑜と根来寺教団に対する宥快（一三四五～一四一六）の批判などにより展開した教主義論争の前提として重要ではあるが、平安時代の教学としての重要性に対する疑問が指摘されたところである。ただしこれまでの頼瑜の教主義に関する研究では、松長有見氏のわずかな指摘以外に、安然の影響を論ずるものは無かった。頼瑜の教主義における安然の影響と、更には安然の影響を受けた院政期東密諸学匠の影響について詳しく検証した点は、本論の重要な指摘と言えよう。また重誉の教学における特殊性の指摘は、他の諸学匠が仁和寺教団系統で

あるところから、それと異なる東大寺・醍醐寺教団の問題としても注目されるし、また義天版大蔵経移入の問題との関係も重要である。

また第三部における非情成仏説をめぐる議論も、その特殊性が日本密教の一つの特徴を示すものであったとしても、成仏論としてはあまりに限定されたものであり、先に成仏論全体の解明が為されるべきではなかつたらうか。

以上、本論文は「平安期の東台両密の教学的交渉」という大きな問題に対しては不足する面も多いが、これまで余り振り返ってこられなかった「東台両密教に渉る俯瞰的視点」を大事にした貴重な研究といえよう。また院政期教学の頼瑜に対する影響を明らかにした点は、今後の日本密教全体にわたる「東台両密の教学的交渉」の問題を究明することを期待させる。ただ今後の研究としては第一部に見られた安然以前の初期天台宗教団における真言密教受容の問題を、密教研究者の立場から解明してくれることを期待したい。これまで天台宗関係者による研究に限定されていた問題であり、真言宗学研究者からのアプローチは、更に新たな視点による問題の解明が為されることを期待させる。また「東台両密の教学的交渉」という点では密教儀礼（事相）が大きな問題となってくる。今後もこのテーマを研究していく場合、事相を含めた更に広範な教学研究が必要になってくるであろう。また資料の引用において、返り点の付されているものもあるが、送り仮名の無いものも多く、どのように読んでいるのか判断の難しいところもあった。論文として公表する以上、論者の読み（書き下し）を提示するべきであると考えます。

以上、本論文は先行研究に対する態度も誠実で客観的であり、東密・台密に亘って、どちらかに偏ることなく、客観的な姿勢を保って文献を精密に読解し、一つ一つの議論を積み重ねており、その論述・結論は概ね首肯される。課程博士の学位に値するものといえよう。